

「必要なことはただ一つ」

(ルカによる福音書 10:38-42)

マルタとは「女主人」という意味の名前です。当時のユダヤ人社会では通常、男性が親族以外の女性と一対一で接したり、女性が男性を家に迎え入れることはありませんでした。既成の習慣を超え、主イエスを迎え入れるほどの信仰をマルタは持っていたのです。先週の善きサマリア人のたとえでは、主イエスによってユダヤ人と異邦人の垣根が取り去られることが明らかにされました。今週はさらに、男性と女性の間の差別をも取り除かれ、すべての命が平等に主に招かれていることが明らかにされます。

マルタと妹マリアは対照的です。十二弟子をはじめ大勢の人がいるなか、マリアは弟子の筆頭かのように主イエスの最も近くに座り、没頭してみ言葉を聴いています。そのマリアを見て姉マルタは腹を立てます。当時の社会の女性のあるべき姿は、掃除をし、食卓を整え、客人をもてなし、給仕を続け、喜ばせることです。マルタは最初、当時の常識に囚われず、女性であるにもかかわらず、主イエスを招き入れました。しかし途中で「女性のあるべき姿」に引き戻され、慌ただしく働くなかで、同じ女であり、妹でもあるマリアも当然自分のように働くべきだと考えたのです。しかし、主イエスはそんなマルタの名を親しみを込めて呼び、言います。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」必要なことはただ一つ。主イエスの近くを離れず、一心にみ言葉を聴くことなのです。

社会生活のなかで無意識のうちに形成される、「こうあるべき」という意識。その意識は、無意識、無自覚のうちに自分の思いや考えを方向付け、支配します。女性のことに限らず、わたしたちにはみ言葉を聴こえなくしてしまう覆いが無数にかけられています。わたしたち一人ひとりがマルタなのです。しかし、主はそんなわたしたち一人ひとりの名前をも呼び、語りかけてくださっています。大事なことはただ一つ。主イエスから離れず、み言葉を一心に聴くこと。その言葉を心と体に迎え入れることです。すると、その言葉が芽を出し、成長し、実を結びます。そこまで耳を澄ませ、じっくりと主のみ言葉に留まって聴く。そうすることによってはじめて、わたしたちに被せられた覆いは取り除かれます。サマリア人であろうが、女性であろうが、誰もが主イエスの足もとに招かれています。